

## 第 271 回新潟外科集談会

日 時 平成 23 年 5 月 14 日 (土)  
午後 1 時 30 分～午後 3 時 22 分  
会 場 新潟大学医学部 有壬記念館

2 酸性物質による腐食性胃炎後の噴門・幽門狭窄  
に対して鏡視下胃全摘を施行した 1 例

田中 亮・矢島 和人・加納 陽介  
角田 知行・市川 寛・石川 卓  
小杉 伸一・神田 達夫・畠山 勝義  
西倉 健\*

新潟大学大学院 消化器・一般外科学分野  
同 分子・診断/分子・病態病理学分野\*

## 一 般 演 題

1 医原性食道損傷に対し二期的に食道バイパスを  
施行した 1 例

堀田真之介・小杉 伸一・神田 達夫  
石川 卓・矢島 和人・畠山 勝義  
桑原 史郎\*

新潟大学大学院 消化器・一般外科学分野  
新潟市民病院 消化器外科\*

症例は 50 歳，女性。2011 年 7 月，前医整形外科にて，後縦韌帯骨化症に対し頸椎前方固定術を施行された。術後，頸部膿瘍を併発し，第 2 病日にドレナージ術を施行された。術中所見にて食道損傷が判明し直接縫合したが，膿瘍腔が拡大したため第 12 病日に同院外科にて食道外瘻，胃瘻造設術を施行された。以後，膿瘍はコントロールされた。第 84 病日に整形外科にて頸椎後方固定術施行され，以後頸椎病変には大きな問題を認めなかった。その後，食道再建術目的に当科紹介され，第 254 病日に手術を施行した。前回の頸部膿瘍は上縦隔にまで及んでおり，遠位側食道断端の処理は困難と判断し，Y 字胃管による食道バイパス術，腸瘻造設術を施行した。術後経過は概ね良好で第 34 病日に軽快退院した。

【結語】頸椎前方固定術後の食道損傷に対し，Y 字胃管による食道バイパス術を施行し，良好な結果を得られた 1 例を経験したので，文献的考察を加えて報告する。

腐食性胃炎は酸やアルカリなど組織障害性の強い腐食剤の飲用により生じる。急性期では穿孔・腹膜炎，大量出血時に緊急手術の適応となり，慢性期では瘢痕による通過障害が手術適応となりうる。腐食性胃炎後に噴門・幽門狭窄を来し，鏡視下胃全摘術を施行した症例を報告する。

症例は 75 歳，女性。自殺目的にトイレ用洗浄剤を飲用し救急搬送された。保存的治療が行われたが，2 ヶ月後に幽門および噴門の狭窄が出現し，3 ヶ月後には幽門の完全狭窄を来したため手術を選択した。5 ポート，気腹法，5 cm の小切開にて腹腔鏡補助下胃全摘，Roux-en-Y 再建を行った。術後経過良好で，第 27 病日に精神科病院に転院した。腐食性胃炎による通過障害は通常，幽門中心であるが本症例の様に胃全摘が必要となることもある。鏡視下手術は良性疾患の技術を悪性疾患へ発展させていったが，悪性疾患の技術を良性疾患に対して還元できた貴重な 1 例である。

3 集学的治療が奏効した，大動脈周囲リンパ節  
転移陽性進行胃癌の 1 例

下田 傑・角南 栄二・黒崎 功\*  
畠山 勝義\*

白根健生病院 外科  
新潟大学大学院 消化器・一般外科学分野\*

症例は 78 才，男性。

【現病歴】胃体中部 2 型進行胃癌，大動脈周囲リンパ節転移にて 2009 年 4 月より TS-1/CDDP を 3 コース施行した。原発巣の縮小および大動脈周囲リンパ節の画像上消失したため，同 7 月胃全